災害への備え 親子で

宮坂建設工業 住民向けに防災教室

救急蘇生講習で、心臓マッサージを行う参加者ら（6日午前10時45分ごろ）

宮坂建設工業（帯広、宮坂寿文社長）は6日、帯広市内のとかちプラザで「親子防災教室」を開いた。親子連れらが救急蘇生の方法などを学んだ。

2014年の広島土砂災害の支援活動をきっかけに、15年から行っている。とかち広域消防局帯広消防署が協力した。この日は700人が参加した。

メイン会場のアトリウムでは救急蘇生講習を実施。帯広ライフサポート協会の佐藤悦弘代表の指導で、心臓マッサージや自動体外式除細動器（AED）の使い方を学んだ。帯広稲田小2年の松原咲弥君(7)は「(心臓マッサージを)初めてやって手首が痛くなった。大きくなったらお医者さんになりたい」と話していた。

ミニドローンの操縦体験や、非常食の試食コーナー、新企画として「防災AR体験」もあり、参加者の人気を集めていた。（中島佑斗）

新聞記事切り抜き	令和元年7月8日	月曜日	北海道新聞	14面

防災教室 楽しく学ぶ

帯広 ＡＥＤ講習やドローン操作

災害関連の調査などに使われるドローンの操作に真剣な表情で挑戦する参加者

親子防災教室が6日、帯広市のとかちプラザで開かれ、約700人が講習や体験などを通じ、楽しみながら災害時の対応や防災の知識を学んだ。

宮坂建設工業（帯広）が主催。会場では心臓マッサージや自動体外式除細動器（ＡＥＤ）の使い方を身に付ける講習が行われ、大勢の親子が参加。応急処置の講座ではアルミシートを即席の担架にする方法などが紹介され、担当者が「階段では、けが人の足が下側になるように」と説明した。

ゴーグル型の機器を装着し、水害による浸水時の歩行を疑似体験できるコーナーは初めての実施。小型無人機ドローンの操作体験も人気で、子供たちが目標の地点にドローンを着地させようと真剣な表情で操縦機を握っていた。帯広市の泉亜衣菜さん(10)は「前に行きすぎないように動かすのが難しかったけど、うまくできて楽しかった」と話していた。（東野純也）

宮坂建設工業株式会社

宮坂建設工業が親子防災教室開催

有事の際の対処法学ぶ

自分の身は自分で守って

【帯広発】宮坂建設工業㈱（帯広、宮坂寿文社長）は6日、帯広市内のとかちプラザで第5回親子防災教室を開催した。模擬AEDを使った救急蘇生講習やミニドローンの操縦体験のほか、新企画として防災AR体験も実施。親子ら約700人が来場し、有事の際の対処方法などについて理解を深めた。

700人が防災意識を高めた

同社では、創始者の遺訓である「世の為人の為につくせ」の精神のもと、さまざまな社会貢献活動を展開。長年取り組んでいる防災訓練は、2003年の十勝沖地震を機に地域住民参加型に拡充して行われるようになった。

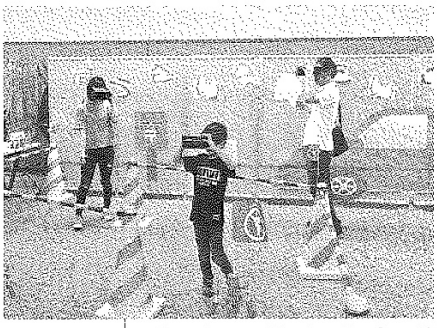
また、14年には広島土砂災害による被災者支援を目的とした炊き出し活動を実施したところ、被災地や避難所などで働く女性や子どもの姿が多く見受けられたことから、15年から親子防災教室を開催している。

開会あいさつに立った宮坂社長は「家庭での防災において足りないと感じたことは、きょうから対策を実行してほしい。最後は〝自分の身は自分で守る〟という意識をもってもらいたい」と、一人ひとりが防災意識を高くもつよう訴えた。

メーン会場の救急蘇生講習では、模擬AEDを用いて心臓マッサージやAEDの使用方法などを実践。親子が一緒になって心肺蘇生法を学んだ。

新企画としては、防災AR体験を実施。参加者はヘッドセットを装着して、腰の高さまで浸水した拡張現実の世界を歩き、漂流物が流れてくるなど水害の恐ろしさをその身で実感していた。

このほか、ミニドローンの操縦体験や新聞紙でスリッパを作る「防災おりがみコーナー」をはじめ、「薬剤師さんから学ぶお薬の飲み方」「身の回りのモノを使った応急手当」と題した講習や防災クイズ、防災グッズ・防災パネル展示なども実施した。



AR体験を通じ水害の危険性を体感した

全国各地で自然災害が頻発し地域住民の防災意識が高まっていることもあり、親子連れなど約700人が集まった。

宮坂社長は「建設業として国民の安全のために社会基盤の整備を担っているが、国民自らが危険を予知・回避することが大切。今後は支社のある札幌でもイベントを行っていきたい」と防災に向けた貢献活動にさらなる意欲をみせていた。

親子防災教室でAR体験コーナー

宮坂建設工業

【帯広】宮坂建設工業（本社・帯広）は6日、帯広市内のとかちプラザで第5回親子防災教室を開いた。今回は災害時の浸水状況をAR（拡張現実）で体験できるコーナーを初めて企画。家族連れ700人が来場し、救急蘇生など災害時に必要となる対応を楽しみながら学んだ＝写真。

同社では2003年から住民参加型の防災訓練を実施。14年に広島県で起きた土砂災害への支援がきっかけとなり、親子防災教室を企画した。

救急蘇生講習には260人が参加。帯広ライフサポート協会の代表で救急救命士の佐藤悦弘氏が講師を務め、応急手当ての手順を説明した。

宮坂寿文社長は「建設業界でも電子化が進んでおり、子どもたちに興味をもってもらうためにAR体験を企画した」と話している。